

## 久延毘古神をめぐって

鎌田純一

『古事記』上巻に記される「久延毘古神」について、平田篤胤が注目して記したところを、深くみられたのが明治聖徳記念学会創設の頃に学会のために大きく貢献された加藤玄智先生である。また、小林健三先生もこれに注目して論を展開された。

この「久延毘古神」についての論は、さらに深くみられるべき重要な問題と考えるので、ここに問題提起の意味でその論について改めて紹介させて頂きたい。

平田篤胤は天保十四年（一八四三）閏九月十一日、六十八歳で世を去ったが、それより九十年のちの昭和七年（一九三二）九月、『国学院雑誌』ではその九十年祭記念として「平田篤胤」特輯号（第三十八卷第九号）を出版している。その中に加藤玄智博士が「平田篤胤翁に対する余の憧憬」と題して一文を寄せられている。それ極めて短文、わ

ずか半頁程であるので、ここに記すに、

一言に尽く、曰く翁の歌に

月花を我もあはれと見てはあれど

あはれと歌ふひまなかりけり

と、平田翁の苦学とその大成は三十一字に尽く、めぐまれざる後進の大に学ぶ可き点であると思ふ。余嘗て刻苦精勵、学業を玉成され三月の卒業期に目出度学校を出られた人を祝して悪詩一首。

螢燈雪案幾年々 人一能之己是千

知得艱難玉成汝 心花亦発百花天

是れ又範を平田翁の勉学に取つたのである。

との如くである。加藤博士は昭和八年三月、還暦停年で東京帝国大学の教壇を去られたのであるから、その約半歳前の文である。これに加藤博士の篤胤に対する深い尊敬の念がみられよう。

平田篤胤は神道を深く研究したが、それは官長と同じく文献学的方法で研究したというよりは、神道を宗教的に更に深めるための追究であつたと云えよう。加藤博士も神道を宗教学の立場より研究するとともに、宗教的に深めようとされていたと云えるかとみられる。篤胤は自らの信仰から神道を単に学問として追究するのみでなく、その宗教性と云える点を追究したが、加藤博士も神道を宗教として把握し、その宗教性を深く追究されたと云えよう。

明治以降、神道は法的取扱上宗教の範疇外に置かれたこと、周知の事実であるが、そのなかにあつて多くの神道学者も神道を宗教の外にみるべきもの、概して固有の道、道徳とみることにした。

すなわち、本居宣長の「直毘靈」に云う「神の道」より発してか、例えば田中義能博士が「神道は神の道である」〔神道概論〕昭和十一年刊・三三頁と説き、溝口駒造氏も「神道とは何物であるか。最も簡単には神ノ道である」

〔神道学概論〕昭和八年刊・四頁〕と説き、山本信哉博士が「神道はいふまでもなく、本邦固有の道である。未だ儒教や仏教の渡来せない以前に既に存在した所の純粹無垢な道である」〔神道綱要〕昭和十七年刊・八七頁〕と説いたあと、それを更に「廣義神道」と「狭義神道」とに区分し、「廣義神道は即ち宗教的神道」〔全書九二頁〕として大社教・金光教とさきものこと、「狭義神道は即ち道德的神道である」〔全書一〇四頁〕と説かれた。

このようななかで、加藤博士は、神道は宗教であると主張された。すなわち、昭和十年十月一日発行の『神道の宗教發達史的研究』の序文のなかで、「神道と名づけられるものに、国家的神道あり、宗派的神道あり、国家的神道の中でも、又国体神道あり、神社神道あり、色々の神道が存してをる。然し余は、凡て是れ等の神道を引つくるめて、神道の全称名辭を以て呼び、是れ等の神道は、取り除け無く、皆一種の宗教であると見るものである。それは仏基二教の如き所謂世界的宗教又は輸入教では無いが、神道は矢張一種の宗教であつて、それは日本の固有教である。特に国家的神道に至つては、古今一貫全く日本の国民的宗教であると考えらるものである。実に神道は、一種の宗教であるから、是れ等の神道に対して、宗教学的考察が可能となり、神道を宗教史的に取り扱ふことも出来るのである。是れ余が本書に題して、神道の宗教發達史的研究と名づけた所以である。」と記しておられる。

さて篤胤は神道を道德とみたのであろうか。宗教とみたのであろうか。これについて篤胤の説くところより考察するに、例えば、篤胤は『靈能真柱』のなかで「古へ学びする徒は、まづ主と大倭心を堅むべく、この心の堅在では、真道の知がたき由は、吾師ノ翁の、山菅の根の丁寧に、教悟しおかれつる。此は磐根の極み突立つる、嚴柱の、動くまじき教なりけり。斯てその大倭心を、太く高く固めまく欲するには、その靈の行方の安定を知ることなも先なりける」と説いている。この「靈の行方の安定を知る」こと、これ単なる道德ではない。また単なる学問、平田学というものだけでなく、宗教、平田神道というべきものであろう。

篤胤の経歴について詳述する必要もなからうが、逆境の中より学問の道に入った篤胤は、ともかくも獅子奮迅の勢

いで一ピークに達する迄精進した時、最愛の妻の死にあい、文政元年（一八一八）十一月、四十三歳のとき再婚した。このころより多くの先学が指摘されているように、篤胤の学問に変化がみられるのである。それは更に学問を追究したことでなく、道を、それも宗教的に求めてのことであつた。

そんな篤胤が、『古事記』にみられる久延毘古神に対し、特別な視方、信仰を持つに至つたのである。このことについては、後述するが、昭和五十年になり小林健三先生が画期的な発表をされた。また、実は加藤博士もこの神に特別な視方をしておられるのである。そこでこの点についてみて行きたいが、加藤博士は全掲書のなかで、「原始神道に於ける原始的唯一神教の形跡」との一節を設け、

原始神道に現はれた唯一神教の神を天之御中主神に認めて、之を論理するに當つて、どうしても一瞥を吝むことの出来ないのは、古事記神話に表はれた久延毘古即ち山田曾富騰の事である。山田曾富騰とは畢竟田の中に立て、害鳥を驚かすに用ふる案山子の事であるが、古事記は非常に又極度に之れを称揚して、

此神者、足雖不行、尽知天下之事神也

とただへてをる。尚古事記の記載する所に拠れば、大国主神が出雲之御大之御崎<sup>み</sup>で、少名毘古那神に始めて出会されたのであるが、大国主神もその扈従の神々も、何れもその新来の神の名が、少名毘古那神と云ふのであると云ふことを知つてをるものが無かつた。然るに此の久延毘古、即ち山田曾富騰は、ちゃんとそれが少名毘古那神であると云ふことを承知してをつた。その通り彼れは智眼炯々、甚聡明なものがあつた。そこで彼れは案山子で山田に立ちづめであつて、一步もあるかないで、而も天下の事を知つてをる神だと云つて、その知識の博大なことを称揚されてをるのである。此の点から云へば、日本神話の知識の神たる八意思兼神よりも、尚勝さつてをる観がある。此の点から云へば、山田曾富騰に、全知 Omniscience と云ふ様な原始的唯一神教の神めいた方面が表

はれてをると謂はなければならぬ。故に平田篤胤は久延毘古神影と云つて、案山子の軸物を尽き、それに題して、

古語云、此神者、足雖不行、尽知天下之事神也、

まさしかる事のしるしは天の下の

物識人やとひて知らまし

との贊をしてをる。

何が故にこの久延毘古即ち山田曾富騰たる案山子などに、全知とでも称す可き、神の聡明性が附いてきたかと云ふに、古事記の記事を見るに、此神者、足雖不行、尽知天下之事神也と、純然たる漢文で書いてあり、而てそれは老子道德教の、

不出戸知天下、不窺牖見天道（第四章）

の文句に大層能く似てをる。それだから、或は奈良朝時代の古事記編纂者の意見が此の神の性質に附加されたものとも見られ、それは決して古代の日本思想で無く、恐く支那思想の反映だらうとも見られる。これも一應尤な考察では有るが、又他方から考へれば、原始的唯一神教は、時にシュミット W. Schmidt の所謂 *Germinaler Monotheismus* とも呼ばれる位で、幼稚な民族間に偶かう云ふ高大な思想が表はれるのであるから、本来神には斯る全知と云ふ如き属性が、有るものだと云ふことを、偶新来の客神の神名が、少名毘古那神であることを知つて居つたと云ふ久延毘古に於て偶然発見して、当時尚幼稚な頭脳の原始神道が、それを久延毘古に於て、洞見するに至つたのであるとも見られるのである。元來天之御中主神の如き原始的唯一神教の神に於て発見す可き全知と云ふ属性を、偶案山子なる山田曾富騰、久延毘古に於て認めたのであると余は考へる。

と記され、さらに、

要之、日本に於ては神の全知てふ屬性が、原始的唯一神教の神たる天之御中主神に表はれずして、とてつも無い、久延毘古又は山田曾富騰てふ案山子に於て現はれてをるのは、実に一奇と謂はざるを得ぬのである。ここに自然民族風の宗教意識の非論理性 *Allogical Attitude* が表はれてをると思ふ。

と記されている。博士はかく久延毘古神を高く評価し、そのような神を記すわが民族の宗教意識に注目されたのである。一方で、

原始神道に於ては、原始的唯一神教の神に該当する形跡のあるものは、天之御中主神であると思はれる。

とも記されるが、そのような神、自然民族風の宗教意識とは別の、知識が整理されての神とともに、その原初期の民族のなかに、絶対的とまでみられ、信仰された神の存在に注目されたのである。

この久延毘古神について、加藤博士が記されているように、『古事記』上巻の少名毘古那神の条にみられる神であるが、念のため、『古事記』を引用するに、

大國主神、坐<sub>三</sub>出雲之御大之御前一時、自<sub>三</sub>波穗、乘<sub>三</sub>天之羅摩船一而、内<sub>三</sub>剥鵝皮一剥、為<sub>三</sub>衣服一、有<sub>三</sub>歸來神一。爾雖<sub>レ</sub>問<sub>三</sub>其名一不<sub>レ</sub>答。且雖<sub>レ</sub>問<sub>三</sub>所從之諸神一、皆白<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知。爾多迺具久白言、此者久延毘古必知之、即召<sub>三</sub>久延毘古一問時。答<sub>三</sub>白此者神產巢日神之御子、少名毘古那神一。(略) 其少名毘古那神者、度<sub>三</sub>于常世國一也。故、顯<sub>三</sub>白其少名毘古那神一、所<sub>レ</sub>謂久延毘古者、於<sub>三</sub>今者一山田之曾富騰者也。此神者、足雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>行、尺知<sub>三</sub>天下之事一神也。

とある。大國主神が出雲国美保崎におられたとき、波頭より羅摩船にのり、鵝皮を剥いだ衣を着て来る神があった。そこで、その神の名を周辺の人々に聞かれたが、誰も知っているものがない。そのとき、蛙がいうに、それは久延毘古が必ず知っているだろうと。そこで久延毘古を召し、尋ねたら、それは神產巢日神の御子、少名毘古那神だと。

この少那毘古那神は、常世の国へ行かれた。そして、その少名毘古那神をよく知っており、紹介した久延毘古について、それは今、山田の案山子といっている。この神は足で歩いて行くことは出来ないが、天下のことをよく知って居られる神であるとの話のなかに出て来る神である。

この久延毘古について、本居宣長は『古事記伝』のなかで、その山田之曾富騰を説いたあと、

さて久延毘古てふ名も、よとともに雨露にうたれ、風に吹き破られなどして、身体の壊れ傷はれたる意にもやあらむ、久豆礼を久延と云は古言なり、

と説き、さらに、

書紀の此ノ段を考るに、大穴牟遲ノ神、己命の大きなる功績ある矜り給ふ意見えたり、然れども己レ命一柱の力にては、功終難かりき、然るに此ノ山田の曾富騰は、たゞ人の形したりと云ばかりにて、人の為事をもえせず、足もえ歩行ず、其状貌はた、甚醜く賤しげなる物の極なり、然るを此物しも、天ノ下の事を尽く知りて、今少名毘古那神を顕シ白せるに依て、其神と相並べて大切を終へり、然れば己レ大功ありとても、必ずほこりがたく、又容貌見ぐるしく微賤き者とても、必ずあなどり棄がたしとの意なるべきか、足雖レ不行と云るは、坐ら天ノ下の事を知ると云意はもとよりにて、大穴牟遲ノ神の、天ノ下を經行きたまふに反対する意もありぬべし、と説いている。

宣長に於いて久延毘古神は充分認識されていないのかも知れない。「久豆礼を久延と云は古言なり」とのことよりすると、久延毘古は崩れ男、「人の為事をもえせず、足もえ歩行ず」醜く賤しいものにとらえられている。

この久延毘古神を篤胤はどのようにみているのであろうか。このことについて、昭和五十年に重大な発表をされたのが先掲のごとく小林健三先生である。小林先生はその著『平田神道の研究』（昭和五十年十月、古神道仙法教本庁

発行)のなかでこの篤胤の久延毘古神観について、追究に追究を重ね「わたくしは、(略)このことについて執拗と思われるくらいに、追究し、その結果、久延毘古命即篤胤である、という結論に到達した。」(二五四頁)と云っておられ、従来「山田博士ですら、久延毘古命について目をとめておらぬ。」(二五三頁)との如く、これまでの平田篤胤研究者がそこに気付かなかった重要問題について論ぜられたのである。

ここで、この問題について小林先生の説かれたところを少しく紹介してみるに、先ず平田篤胤の学問業績として、従来『古史成文』『古史徴』『霊の真柱』の三部を挙げ、これが代表作で、あとはこれを細かく敷衍する程度のもつてみられて来たが、小林先生は果してそうか。これでは篤胤がその学問熟してよりの文政八年から天保にかけての玄学研究の成果をどうみるのかと追究、そこに篤胤の学が単なる文献学でなく、古道学として大成したのであり、宣長の学とは相異し、「肝心の関節にいたっては、いたく相異し、宣長の想像もせぬ新分野を開拓して新説を開陳している」と見てよい。(略)この新説をわれわれは新しい発展の相において認め、これを大壑神道と呼びたいと思う。」(六頁)とみられ、篤胤自身、老子勉学のことより号した大壑の名より、その玄学研究成果を高く評価されるのであり、「篤胤の生涯からいって、この玄学遍歴は、たんなる流浪の余暇的仕事ではなかった。はつきりした目的があったのである。すなわち、古始を知って道紀を立てたからにはかならぬ。」(二六六頁)とみられ、その篤胤の後半に記した『玉たすき』『每朝神拝詞』を追究、その『每朝神拝詞』は文化八年(一八一二)撰述、文化十三年原板のあと、文政十二年(一八二九)増訂改刻とそのあと訂正改刻されて来たことをみた上で、そこにみられる篤胤の久延毘古命観の推移を追究、結局、篤胤の久延毘古命についての説を分析すると、

(1)久延毘古命は、あらゆる神像の原型となるもので、尊貴な存在態である。

(2)この神にはあらゆる神祇精霊が憑きますのである。

(3)神典にはこの神を「足は行かねども天下の事を尽く知れる神」と申してある。少毘古那神が海を渡ってきませ



るとき、ここは皇産靈神の御子少彦名神なり、と顕わしたことでもわかるとおり、天上天下のあらゆる事を知る神であることがわかる。

(4) 従つてこの神に祈ることは、自分のなし能わざることをも發揮して、可能とするという靈力を賦与されることに通じる。

(5) 故に自分はこの画像をつねに傍にかけて天勝国勝奇靈千憑毘古命と尊称して拝礼する。祈つて神祇万靈の幽助を願う心からである。(二三九頁)

と集約して記しておられる。而して、さらに小林先生は、その『神拝詞』のなかで、篤胤が

掛巻くは畏けれども、吾魂はやがて神の分靈にしあれば(略)此軀即奇靈千憑彦命に等し、

と唱えることに注目、さらに平田家二十五部秘書の一といわれる『密法修事部類稿』にみられる久延毘古命について考察して、

ここに「久延彦」の神が即ち「我れ」に通じ、その我れは、秘儀を行ずる篤胤自身のことを物語る、と見て差支えないと思う。

と指摘しておられる。大変な指摘であろう。

篤胤は幕府よりその学問、また行動について警戒され、結局天保十二年(一八四二)江戸に居住することを許されず、秋田に追放されたが、『伊布伎酒屋歌集』のなかで、

天保十二年と云としのむつき。江戸をたちて、故郷にゆく道すがらよめる。

と記して、数首掲げたあと、さらに

ふるさとに行くみちすがら詠る歌ども。

と記して、

武蔵野に棄てられぬとも久延彦の

また秋の田に立栄えまし

を掲げ、さらに、

ながつきのはじめのころ、甚くむすは、れたる事のありて詠める。

張る弓の放ちもあへず秋の田に

また立つ足もなき曾富騰かな

とあるのをみると、篤胤の久延毘古命観はさらに明らかであろう。

かく篤胤が深く追究し、信仰した久延毘古神について、加藤博士も非常な関心をみせ、そこに神道の宗教意識をみられたところ、さらに小林先生もこの点に大きく注目されて論を展開されたところに、神道研究上続いて深くみるべき問題点があるとみるのである。